

まろやかな

真夜中



寝つきが悪いことを友人に相談すると、
「まるやかな真夜中、と早口言葉で十回唱えるとよいよ」
と言われたから、早速その夜、僕はそれを試してみることにした。
「まるやかなまよなか、まるやかなまるや...、あれ、まよなかや...」
なかなか難しい。
「まるやかなまるなか、あれ？まよらか...」
隣で寝ていた弟が声をあげた。
「もう、うるさいなあ、静かにしてよ！」
「邪魔しないでよ、黙っててってば、もう...まよだまな...あぁっ！」
結局弟は別の部屋で寝ると言って出て行き、僕はさらに続けた。何度も間違え、そしてようやく言うことができたのだった。
「...なか、まるやかなまよなか！できた！」
あまりに嬉しくて思わずベッドの上で跳ね起き、そのとき既に外が明るくなっているのに気付いた。時計を見ると、もう朝の六時を過ぎている。騙された気分になった。そういえば昨日は四月一日だったような...

そのときだった。突然外が光り、その光の中から蝶ネクタイの紳士が現れたのだ。彼は僕を見て言った。
「ようこそ！まるらか...まよら...まるやから...まるやかなまよら...まよ...」
気の毒になって僕は言った。
「まるやかな真夜中へ？」
紳士は照れくさそうに、しかしうれしそうにうなずいた。そして紳士は僕の手を取り、光の中へ入っていった。そこは本当にまるやかな、真夜中だった。
「本当にまよらかですね」
と僕は言う。すぐに間違いに気付いたけれど、紳士は答えてくれた。
「ええ、とてもまるらかでしょう」
彼も間違えている。けれど僕達はにっこりと笑って、そしてまるやかな真夜中が始まったのだった。